平成２３年度（2011 年度）

小学校英語活動に関する研究

小学校における外国語活動は、いよいよ今年度（平成２３年度）から完全実施の運びとなった。全小学校からの研究員による研究も５年を過ぎた今年度の部会は、①「英語ノート」の活用を基本にしながら、児童の興味・関心にそった内容にするための視点や工夫のしかたなどについてのより具体的で実践的な手法の研究②小中連携～特に中１ギャップの解消のための小中相互理解を目指して～の２つを活動のテーマと定めた。

今年度は小学校外国語活動の目標・評価の規準の確認からはじめて、それらにのっとった指導案を作成した。また毎年の課題である小中連携についても、中学校英語部会との合同部会開催という具体的な取り組みを実施した。

＜研　究　員＞

新村　寿恵　　箕面市立箕面小学校

宮本　泰治　　箕面市立萱野小学校

荒谷　和夫　　箕面市立南小学校

小林　瑞枝　　箕面市立萱野北小学校

足立　稔美　　箕面市立西南小学校

安達　隆史　　箕面市立萱野東小学校

尾川　栄　　箕面市立豊川北小学校

前澤　鮎子　　箕面市立豊川南小学校

兼平　史郎　　とどろみの森学園（箕面市立彩都の丘小学校）

小谷　周平　　箕面市立萱野小学校

徳田　耕一　　箕面市立北小学校

上田　優子　　箕面市立南小学校

濱田　昌　　箕面市立東小学校

山下　泰平　　箕面市立西南小学校

升谷　美帆　　箕面市立中小学校

細田　賀代子　箕面市立西小学校

平松　真咲　　彩都の丘学園（箕面市立止々呂美小学校）

＜スーパーバイザー＞

竹内　理　　関西大学　教授

池田　真生子　　関西大学　准教授

Ⅰ　研究テーマの設定について

新指導要領による、今年度（平成２３年度）からの小学校における外国語活動の完全実施をうけて、次の２点を研究のテーマとした。

1「英語ノート」の活用を基本にしながらも、児童の興味・関心にそった内容にするための視点や工夫の仕方などについてのより具体的で実践的な手法の研究

2　小中連携～特に中１ギャップの解消のための小中相互理解を目指して～

Ⅱ　研究実績

４月１３日　　第１回究部会「今年度の研究の方向性について」

５月２７日　　第２回研究部会「『小学校外国語活動』は、どうあるべきか」
（講師）　竹内　理

６月１４日　　第３回研究部会
「指導案作成のポイント～全体の流れを中心に～」
（講師）　池田　真生子

７月２６／２７／２８／２９日
研修「小学校英語活動実践研修」（兼：教育センター夏季研修）
（講師）シャフセインリ・ラフマン、クリス・デビアシ、
ダン・ノックス、マーク・アディソン、
ジュリアン・ローズ、ミゲル・トレス・スアレス

８月３日　　研修「明日に活かせるアクティビティ」
（兼：教育センター夏季研修）
（講師）　池田　真生子

９月２０日　　第４回研究部会「指導案作り」

１０月１８日　　第５回研究部会「指導案の発表と講評」
（講師）　池田　真生子

１１月１４日　　第６回研究部会　研究公開授業
（授業者）　萱野東小学校　安達　隆史
ＡＬＴ　マーク・アディソン
研究協議・講演「小中連携を目指してできること」
（講師）　池田　真生子

１２月１日　　第７回研究部会「評価」

１月２６日　　教育フォーラム（兼：第８回研究部会）
「これが小学校外国語活動です」小英研究部会からの報告

２月１４日　　市教研「中学校英語部会」公開授業研
（兼：第９回小学校英語活動研究部会）

Ⅲ　研究内容

研究部会各回の資料（別添）

Ⅳ　研究の結果

研究部会各回の資料（別添）

Ⅴ　研究のまとめ～次年度への課題を含む～

新学習指導要領により、いよいよ今年度（平成２３年度）から小学校における外国語活動が全国の公立小学校の５・６年生で毎週１時間実施された。本市における小学校での外国語活動（英語活動を含む）に関する研究の歩みを振り返ると、平成１３年度（2001年度）に「小学校における英語学習のあり方に関する研究」部会を立ち上げてから、ちょうど十年目を終えたところである。小学校における英語が「総合的な学習の時間」の国際理解教育の一環として導入されたところから、準備を重ねる形で今年度の外国語活動の必修化に至ったと考えている。

毎月スーパーバイザーを招いての研究部会では、小学校英語活動のねらいとすること・評価について等を再確認したのち、「英語ノート」を教材として、児童にとり具体的で効果的な活動について研究を深めた。教育センター夏季研修では授業実践に役立つヒントについてスーパーバイザーから多くの示唆を受けた。（研究部会各回の別添資料参照）また小中連携については、教育センター中学校研修を小学校英語活動研究部会と兼ねることとして、小中交流を行った。また毎月の市教研「中学校英語部会」のうち２回を小学校英語研究部会と兼ねた。２月の教育フォーラムでは参加の教職員にティームティーチングによる小学校英語活動を実体験してもらい、情報共有に努めた。

これらの地道な積み重ねを踏まえて、次年度は小学校英語部会が他教科と同様に箕面市教育研究会の中に位置付けられる。これまでの研究部会の積み重ねを土台として、さらなる研究を深めていく必要があることは言うまでもない。そこで研究部会を兼ねた、市内教職員の自主研究組織の中の小学校英語部会の歩みを新たに作っていきたい。

今年度まで教育センター夏季研修で実施してきたALTを講師とした「小学校英語実践研修」も次年度は、学校からの要請を受けた出前研修となる。小学校５・６年担任のみならず、校内での実践研修を充実させたい。大阪府の「使える英語プロジェクト事業」も次年度は２年目となる。研究校のとどろみの森学園・彩都の丘学園からの情報発信も有効に活用して次年度の研究を充実させたい。

次年度は①新しい外国語活動教材「Hi,frieds!」」の効果的な活用の研究②小中連携のさらなる歩みを目指す研究をテーマと設定する。

（別添資料①）

小学校英語活動に関する４月研究部会（報告）

【Ｈ２３年度（2011 年度）活動テーマ】

●「英語ノート」の活用を基本にしながら、児童の興味・関心にそった内容にするための視点や工夫の仕方などについて、より具体的で実践的な手法を研究する。

【スーパーバイザー紹介】

●関西大学教授　　竹内　理

●関西大学准教授　池田　真生子

【各学校の英語授業の様子の交流】

●校内の「外国語部会」で情報を共有することができている。

●「英語部会」のようなものが自校にはないので、なかなか学年を越えての連携は難しい。

●小中一貫校なので小中の連携ができる。

●前年度からの引き継ぎはなかなかできていない。５・６年担当でなければなかなか英語活動の様子はわからないという感覚がある。

●３５Ｈの確保は厳しいのが現実である。

【今年度研究の方向性について】

●同一中学校区の小学校ごとに授業案を共有するなどの交流を行う。

●可能な限り小中の連携を行う。

●ＡＬＴとの英語研修を行う。また幾つかの中学校区で公開授業と研究協議（１１月）を実施する。

【今年度の研修予定】

●７月２５日（月）～２８日（木）１４：００～１６：００

夏季研修（兼７月部会）　小学校英語活動実践研修【ＡＬＴ】

●８月３日（金）１４：００～１６：３０

夏季研修（兼８月部会）　授業力アップ講座（小英）【池田准教授】

【「使える英語プロジェクト事業」について情報共有】

【その他】

●年度当初のＡＬＴとの打ち合わせ状況について

＊基本は５・６年担任がたてた指導案をＡＬＴにみてもらい授業を組み立てていくことを確認しあった。

＊時間的な問題で３学年が同日に打ち合わせをする必要もある。しかしあまり先のことを打ち合わせず、なるべく翌週の計画について打ち合わせることにしている。（互いに忘れてしまうので）

＊英語授業はあくまでも学級担任がメインであること、少なくとも最初と最後のあいさつは学級担任がリードすることをＡＬＴと確認しあった。

＊ほとんどはＡＬＴとの授業を組んだが、あとの８Ｈはどうしてもａｌｔなしで英語授業を実施することになる。前時の内容や活動を振り返っての復習を学級担任が実施することとした。「外国語部会」では夏季休暇中に英語活動について校内交流する計画である。

＊打ち合わせは長めの休憩時間や昼休みなどの授業の合間に実施している。

＊カード活用や電子黒板の使用、日曜参観の計画等をＡＬＴと打ち合わせる。

＊５・６年の授業が学年行事などで空いたときには、他学年のＡＬＴとの英語活動も臨機応変に組み入れることもある。

●英語ノートの配布について

＊一斉配布をした。ほとんどの小学校では各教室保管としている。理由は持ち帰らせて次回の英語授業に持参しない児童があると困るため。１校のみ教科書同様に持ち帰らせている。

（別添資料②）

小学校英語活動に関する５月研究部会（報告）

【竹内教授による指導・助言「小学校外国語活動の目的とは？」】

●小学校外国語活動とは？？

・５年生、６年生とも年間３５時間の活動ということ。週に１回。７０時間を２４時間で割ると、約３日。たった３日間である。２年間かけて３日。それだけで到底外国語を習得できるとは思わない。

●目的とは？？

・研究部員意見「英語に親しむ」「活動する」「文化を知る」「本場の発音を聞く」「文字に慣れる」→→→言語習得ではなく、態度の育成が目的である。

●言語習得ではない、態度の育成が目標

・もし目標が言語習得なら、３日以上やらないとだめ。

●「態度の育成」の態度とは？？

・研究部員意見「英語で話しかけられても臆さないこと」「英語で話しかけられても逃げないこと」「自分から困っている人を助けようとすること」「英語で話しかけていこうとする態度」「英語がわからなくても、なんとかジェスチャーで理解しようとする」「間違いながらも英語を使ってみようとする」

・＜ペアワークで＞

見つめ合って１分間話そう→まずはあいさつから→日本人の特性か、お辞儀

が多い→外国の人相手ならまずは握手するだろう→握手しながら相手の目を見ているか→握り方が柔らかすぎる→強めに握手する・目をみて・お辞儀をしないで・にこやかに・２～３回は握手する

・日本ではお辞儀をする文化なので相手との距離をとる。遠い相手とは握手できない。つまり相手との距離のとりかたは国によって異なるということ。
文化・態度の育成とは英語を使わなくてもできるということである。

●文化を知るとは？？

・ＡＬＴと一緒に考えてみるとよい。たとえば英語で「ただいま」は？
たとえば英語で「おかえり」は？英語で「おかえり」はない。すべてを翻訳できるとは限らない。日本語のすべてにあてはまる英語があるとは限らないと知るのも大事なことである。

●音声・体験中心とは？？

・研究部員に「No」をジェスチャーで表現すると？「最強のイヤというジェスチャーを考えよう」様々なジェスチャーがでた。→→→前に一歩踏み出して「No」と発語しながら言うのが最強のイヤというジェスチャーである。このようにいろいろ児童に考えさせるのもよい。

・　ＩＣＴはこの【音声】部分で利用する。いつもＩＣＴを利用することは、ＡＬＴや先生がいるのにもったいない。

●　文字は二の次

・　意図的には教えない。無理して教えず認識程度と考える。たとえば文字の形をからだを使って教えることもできる。文字を教えることや文字を書くことをメインにはしない。

●「授業組み立てのコツとは？」

○上述の目的にあった活動を

○知的レベルにあった活動を（プロジェクト型）

・５・６年でゲームや歌、リズム体操ばかりではイヤがる。

・何回かで（＝単元ということ）目的を達成することを考える必要がある。

・たとえば3回で「卒業メッセージをつくろう」２回で「絵本の読み聞かせを下級生にしよう」ということを計画し、最終回でできた、手に入ったというものが必要。

・単元の考え方で授業をする。単元の積み重ねの中で、何回目にＡＬＴに入ってもらおうかと考える。たとえば1回目か3回目にＡＬＴに入ってもらう。英語を聞かせる場面や英語を伝える場面として設定するなど。

○クールダウンを忘れずに

○評価は教師のためでもある

・ゲームで終わらないこと。最後の５分で授業を振り返る。楽しかったか？と

聞いて楽しかったと書かせるのではなく、どんな発見があったのか、どんな学びがあったのか、日本語とどう違っていたのかを具体的に書かせて決して誘導はしない。

・結果は教師にかえってくる。

●「評価の方法とは？」

◎評言中心◎目的達成◎態度評価

・評価は３つの観点で。

① 関心・意欲・態度

② 文化や言語に積極的であるかどうか

③ 聞くこと・話すこと

・評価はコメント中心で。書き方は「～できた」ではなく「～しようとしている」と。

・上述３観点を態度で評価する。また評価は何人かで話し合って、表現をプールしておく。人によってバラつくことはだめ。みんなで集まって、この線でいこうと決める。

●将来にむけて

◎小・小連携◎小・中連携

・となりの小学校と足並みをそろえること。そうでないと中学へ行ってからかわいそうなことになる。(進んでいる子を待たせることになる・進んだ意味がない)

・ 両小学校が連絡をとりあって進んで行きたい。小・小連携は小・中連携より意味がある。どんな単語を使ったか、どんな教え方をしたか、英語ノートのどこまでやったか､､､などを小・小で言い合い、これカルテを作って中学校へ渡す。互いを知ることが大事。

● 最後に

・ 可能なら英語を使う機会を設けること。

・ 使う場所がないのはおもしろくない。

・ たとえば学期に１回は大学生を連れてくるとか、活動のチャンスを作る。

・ 交流でも絵本の読み聞かせでもオーディエンスがいること。５・６年では考えることが大事になるので絵本の読み聞かせなら、どれぐらいの大きさの絵本を作るのか？どのようなスピードで読むのか？聞かせる隊形は？絵本の内容を先に日本語で知らせる？などを考えさせる活動をすることが大切。ただ遊ぶのではなく活動を考えることが大事になる。

● 質疑応答

・ 英語活動は視聴覚室で行っているが、ＡＬＴが仕切ってくれているのが現状で、子どもの動きがぐちゃぐちゃになりがち。活動は楽しいが、規律についてはどう考えればよいのか？（萱小：宮本先生より）

・ 大事なことを質問されました。

机なしでも班ごとに座るとか、遊んで終わらないことが大切。できれば普通教室でやる方向が望ましい。他教科でも班活動をやっておいて、英語でも机を４つあわせて班でやるとか。教室に余裕があれば英語教室でということになるが。たとえば座るスペースをコーンでサークルをつくって目印をおいたり。たとえば静かにする合図を決めたり、活動前に日本語でよいのでルールを導入しておくことが必要。今は視聴覚室でもだんだん一般教室でやることを考える。将来的にはどうなるのか、、たぶん英語は教科になるだろう。今はＨＲＴが三分の一でも、だんだんとＨＲＴとＡＬＴが半々で目的にあわせてリーダーシップをとるようになればよい。ＡＬＴはプロではない。ＨＲＴはプロであるから、自分たちがリーダーとして教育の効果をあげるという方向へ。（竹内教授）

・ 自校では５つの観点だが、さきほど３つの観点のことを聞いた。それは評価しやすいだろう。（南小：荒谷先生より）

・ ５つの評価は果たしてつけられるのだろうか。細かいとしんどい。どんな理由で５つの評価をするのか？と尋ねてはどうだろう。指導要領では４つだが、話すこと・聞くことをひとつにまとめた３つの評価がよいだろう。（竹内教授）

（別添資料③）

小学校英語活動に関する６月研究部会（報告）

１）指導案作成のポイント（池田准教授レジュメより）

１．１時間ごとではなく、（単元）ごとに指導案を作成する

２．単元内で（聞く）活動→（話す・発信する）活動とすると負荷が低くなる

３．各授業の（目玉になる活動）を決めるとやりやすい

４．復習を（スパイラル）に（単元内、単元間）

５．（単元の目標）に合致した活動を

６．（担当クラスの児童）に適した活動を

●英語ノートではレッスンが９つあり、レッスン１つをだいたい３～４時間のセットと考える。（セットで考えないと、全体の流れが作れず、つながりを失ってしまう）

●あれもこれも・・・と考えるとつながりにくいので、メイン活動を３～４つ考えるとよい。

●児童がどんなことができるようにしたいのかという着地点を決めておくこと。（前で発表するグループごとに）

●スパイラルとは、前にやったことをうしろのレッスンでもやるというようなこと。それをすることで思い出せる。

●単元の目標とは、３つの評価の観点をすべて含んでいなくてもよい。
よい活動だと思っても、単元の目標にあっていないとだめ。

●英語ノートの内容を変えてもよいということ。担当クラスの児童にあったものに変えてよい。たとえば他教科との関連で内容を変更することもＯＫ

●６～１０月まで指導案について考えることは指導書を見るチャンスと考える。

●第１時から第２時までは、リスニングやからだを動かす活動を考える。

●第３時からは口を動かす活動を考える。

●評価基準は指導要領より。

①日本と外国の両方の言語・文化について知り理解しようとする。

②相手が話すことをよく聞いて理解しようとしたり、自分の考えを相手に伝わるように話そうとする。（コミュニケーションの態度）

③ 英語に興味を持ち、英語を聞いたり話す活動に積極的に取り組む。

２）「本日のポイント」の確認のしかた

●どこかで３つの目標の１つでもあるかどうか確認する

●どれを評価のポイントにするか？単元の目標にあっているか？

●やろうとしたかどうかで児童の評価ができる指導案になっているか？

［研究部員感想］

＊ 目的意識のないまま何となく高学年の担任だからと授業に参加していたので多少ですが目が覚めました。

＊ 具体的なお話だったのでとてもお話がききやすかった。

＊ 現在の英語活動のやり方が正しいかどうか自信がなかったので小学校での効果的な指導について聞くことができてよかったです。

＊ わかりやすく、外国語活動の観点がわかった。

＊ 「目的が言語習得ではない」という部分が理解できました。

＊ あいさつのしかた（日本人と外国人の違い）を体感できました。

＊ 規律の話はとても参考になりました。ぜひ生かしていきたいです。

＊ たくさんあったのですが、、、質問に出ていた「特別教室での規律について」です。私も困っていたことなので聞けてよかったです。

＊ ふりかえりの大切さを感じた。いろいろな取り組みを知ることができたので充実した。

＊ 「おかえり」や「いただきます」は確かに深く考えてはいなかったと思いました。日本人の気質は体に染みついていることが実感できました。

＊ 実際にペアを組み、色々あいさつの練習ができました。基本的なことだが、改めて外国のあいさつの仕方など文化を知ることができた。

＊

（別添資料④）

小学校英語活動に関する７月研究部会（報告）

●池田先生レジメより

【目標】

●毎時間３観点が含まれていなくてよい（１単元中１回で十分）

a.言語・文化について知り、理解しようとする

b.コミュニケーションを図ろうとする態度の育成

c.音声や基本的な表現に慣れ親しむこと

単元の目標は abc をより具体的にしたもの

【評価】

●評価ポイントが把握できているか

●評価ポイントが（単元の目標）と合致しているか

●「～できる」ではなく（～しようとする）の評価

・ひとつのレッスンをするとき「今日はどこで評価しようか」と考える

・ヤマになっているところはどこか把握する

・今日はどこがヤマかのポイントを定めていると授業がやりやすくなる

・たとえば塾に行っている子がなまけ気味になっているとして、英語はあまりできないが一生懸命に活動している場合と、どちらの子の評価が高いだろう？英語ができる子をほめて評価を高くしないこと

（別添資料⑤）

平成２３年度（2011 年度）授業力アップ講座（小：英語活動）

１　日時　平成２３年（2011 年）８月３日（水）１４：００～１６：３０

２　主催　箕面市教育委員会

３　場所　教育センター　中研修室

4　対象　小学校教職員
5　受講者数　７名
6　講師　　関西大学　准教授　池田 真生子
7　内容　①「明日に活かせるアクティビティ」として指導要領にある
　　　　　３つの目標にあった活動について考える（追加や差し替え）
　　　　②単元を決めて、実際に追加や差し替えを用いた指導案づくり
　　　　　を行い発表しあう

＜有意義だったとの評価の理由＞
・３本の柱を中心に授業を組み立てるというイメージが実践の中でつかみやすかった。
・講義を聞いたあとで実際にプランを立てて発表できたし、他の発表も参考になったから。
・すぐにレッスンに役立つものができてよかったです。
・教材・資料集をたくさん見ることができたから。
・少しずつ他教科の授業内容のように授業者と ALT とでアイディアをだしあって進んでいくためにヒントになった。
・必要な活動について考えるポイントを改めて考えることができた。

＜印象に残ったこと、おもな感想＞
・文化や言語について、体験的に理解させるのは難しいと思いました。
・とにかく具体の中で慣れていくことが優先だなと思いました。
・目的にあった内容をさしかえて授業案を作るということを学べてよかったです。
・３つの目標を常に考えて指導案を作ることが大切だということ。
・文化というのは日本の文化でもよいと考えることができた。教科書にもアレンジする余地があると思えた。英語はしばらくふれていないとどんどん忘れてしまうと少し焦りました。

（別添資料⑥）

小学校英語活動に関する１０月研究部会（報告）

［指導案について］指導案発表に関しての池田准教授による講評（抜粋）
●目標と評価がつながっているということが大事。
●毎回全員の評価をすることは難しいので、特に気になった子についてチェックする。

●評価の基本はＡＢＣ段階のＢで。

●１時間の中の「評価のポイントはどこか」をわかっておく。

●たとえばＡＬＴの一日の生活を聞く場合は、「異文化理解」を盛り込むとよい。

●書く作業は、児童がひらがなやカタカナでササッと書くことができるものを。

●ゲームの説明を英語でするよりも、英語の指示を聞いて、子どもが動くというような英語を使うのがよい。ＡＬＴの英語を聞かせて英語にふれるということも大事ながら、デモをやりながら英語を聞かせるとよい。

●発表前のグループ練習の場合、グループ内で役割分担をするというアイデアはよい。

（別添資料⑦）

小英研部会　外国語活動指導案

日時	平成 23 (2011) 年 11 月 14 日(月)　５限目(13:40〜14:25)
場所	箕面市立萱野東小学校　多目的室
学年・組	６年３組　３２名
指導者	安達　隆史　　アディソン・マーク
単元名	Lesson7　『What time do you get up?』
単元目標	・世界には時差があることに興味を持つ。 ・積極的に自分の１日を紹介したり、友だちの１日を聞き取ったりしようとする。 ・自分の『理想の１日』の生活を紹介する。

児童観

本学級の児童は、明るく素直である。教師からの働きかけに対して素直に行動することができる。しかし、自ら考え行動することが苦手で、分からないことや自信がないことには消極的になってしまう。また、間違うことや友だちと違うことを気にするあまり、自分自身の考えを表現することに躊躇する子が多い。

そのような児童の様子から、人と違うことを気にせず自分の考えに自信を持ち表現できることが大切であると考え、グループでの活動を多く取り入れてきた。他の教科でも、隣の児童と考えを交流する“ペア対話”や、班で交流する“グループ対話”、友だちの意見に付け足しや修正を加えてまとめる“３組の考え”など行ってきた。また、間違っていることを否定せずに、考えの中から良かった点をみつける“肯定的評価”を意識してきた。これらの取り組みの結果、「間違っていても誰かがフォローしてくれる」「自分の考えに自信がなかったけどグループで交流した考えだから発表できる」と前向きに授業に取り組む子が増えてきている。

単元計画

Lesson7 自分の一日を紹介しよう	言語材料・語彙	第一時	第二時	第三時	第四時（本時）
	〔言語材料〕 〔語彙〕 1～60 時刻 動作	〔目標〕 世界の国々の時差を知るとともに、時刻の言い方を知る	〔目標〕 さまざまな動作の言い方を知る	〔目標〕 ALTの1日の生活の話を聞き、理解する。 自分の生活について紹介する。	〔目標〕 自分で考えた「理想の1日」を紹介する
		〔内容〕 ①挨拶 ②Let's Play 1～60の復習 ③時刻の言い方を知る ④時差について知る ⑤振り返り	〔内容〕 ①挨拶 ②時間と数の復習 ③p47動作の言い方を知る ④Let's Chant ⑤Let's Play ビンゴゲーム ⑥Let's Listen（何時何分） ⑦振り返り	〔内容〕 ①挨拶 ②時間と動作の復習 ③『マーク先生の1日』 （時間軸に記入） ④『自分の1日』を記入 Gで紹介→代表が発表 ⑤時間・動作ゲーム ⑥振り返り	〔内容〕 ①挨拶 ②『マーク青年の1日』 時間と動作の復習 ③『理想の1日』を考える Gで発表 ④クイズ 「誰の1日でしょう」 ⑤振り返り

通知表観点（評価基準）	主な判断材料			
	第一時	第二時	第三時	第四時
日本と外国の両方の言語・文化について知り、理解しようとする。	時計の読み方にふれ、世界の国々の時差を時計盤で表現しようとする		ALTの1日の生活を聞いてさまざまな文化の違いを知ろうとする。	ALTの1日の生活を聞いてさまざまな文化の違いを知ろうとする。
相手が話すことをよく聞いて理解しようとしたり、自分の考えを相手に伝わるように話したりする。			ALTの1日の生活を聞き、想像し理解しようとする。	自分の『理想の1日』を相手に伝えようとする。 友だちの『理想の1日』を聞いて理解を深め

				ようとする。
英語に興味を持ち、英語を聞いたり話したりする活動に積極的に取り組む。		教科書に載っている動作だけでなく興味がある動作を知ろうとする。	『自分の１日』をジェスチャーなどを使って伝えようとする。	自分の『理想の１日』をジェスチャーなどを使って伝えようとする。

指導観

５年生から始まった英語であるが、大半の児童が初めての出会いであった。(本学級では、英語教室に通っている児童は数人、帰国子女は一人)。「英語は分からない」「英語は難しい」という先入観から苦手意識が強く消極的になってしまい、声が小さかったり、手が挙がらなかったりする様子が見られた。そのような現状から、ゲームやクイズなどの活動を通して、楽しみながら英語に触れる授業づくりを心掛けてきた。また、ALT の発音を聞くだけでなく、全ての児童が必ず１回は発音できるような活動を取り入れてきた。

本単元は、日常生活の中の時間や動作の表現について知ることがねらいである。前時では、時間や動作の表現を使って、学校生活を中心とした“自分の１日”を紹介した。本時では、児童がより興味を持って考えられるよう“理想の１日”を紹介しあう。「もし１日だけ誰にも邪魔されず自分の好きなように過ごせるとしたら」という児童に関心の高い設定の中、表現したいことを友だちや ALT、担任と相談しまとめる。ここでは、英語で書くことがねらいではなく、英語で相手に伝えることに重点を置く。その後、クイズ“誰の１日でしょう”を行う。自分の生活を紹介したり、友だちの発表を聞いて、自分の生活と比べたりすることで、違いを認め合ったり友だちの新たな面に気づいたりして、互いの理解を深めることにもつなげていきたい。

また、ALT の生活(「マーク先生の１日」と「マーク青年の１日」)を聞くことで、外国の文化を知り、興味を持たせたい。

(教材資料)

自分の一日を紹介しよう

組　　名前

I get up	at　　:	起きる
I go to school	at　　:	学校に行く
I eat school lunch	at　　:	給食を食べる
I go home	at　　:	家に帰る
	at　　:	
	at　　:	

I take a bath	at :	お風呂に入る
I go to bed	at :	寝る

理想の１日を紹介しよう

組　　名前

I get up at : .	○時に起きる。
at : .	
at : .	
at : .	
at : .	
at : .	
at : .	
I go to bed at : .	○時に寝る。

クイズ大会“誰の１日でしょう”

１班		５班	
２班		６班	
３班		７班	
４班		８班	

英語：ふり返りカード　　　月　　日(　　)

組　　名前

＜今日のめあて＞

・マーク先生の１日を聞いて、動作と時間の表現を知ろう。
・自分の希望の１日の生活を相手にわかりやすく紹介しよう。

＜今日の授業のふり返り＞

よくできた…◎　　　できた…○　　　もうすこしがんばろう…△

①先生の話をしっかり聞くことができた。	
②先生の話す言葉をくり返し言うことができた。	
③希望の一日を言うことができた。	
④動作や時間の表現が分かった。	

＜発見や感想＞

（別添資料⑧）

【小学校英語活動研修　兼小学校英語活動に関する１１月研究部会（報告）
兼市教研中学校英語部会】

参加者による【交流】

＊意見・感想

・中１の週３回の授業の中でも復習することは大変なのに、週１回の外国語活動の復習があれだけできるのはなぜか、教えてほしいぐらい。子どもたちが聞いていてわかるのかなということは疑問だが。ジェスチャーをさせるとか、絵を使うとか。子ども間の交流の時間をもっとほしいかな。（中学）

・ＡＬＴのマークの生活を紹介して、文化の違いを混ぜていたのがよかった。電子黒板を活用しながら、どんどんフレーズがでていることに感心した。（中学）

・言語材料の多いことにびっくり。どこまでさせようとしているのだろう。
週１の活動では難しいのでは？楽しそうにやっていたことにびっくり。どこまで小学校で育てて、中学校にどうつなぐのかが大事。（中学）

・復習・語彙量、スピードに感心。よくやれていた。Ｔ：「play　the・・・ときたら？」→Ｓ：「楽器」というやりとりにはびっくり。（小学校）

・配布のワークシートの指示がたくさんあってどうなるかと思ったが、スムーズだった。（小学校）

・ティームティーチングの中のＨＲＴとＡＬＴの分担する量について学ぶことができた。やはりひとりひとりに発表させたい。リピートはみんなで行い、その後ひ

とりひとりへ・・・ということだろう。（小学校）

Q：ひとりひとりが発表するというスタイルはどれぐらいの時間をかけて練習したのか？

安達先生：まずは子どもがマーク先生を好きであることが大きい。また子どもたち　に「いつも前向きにがんばろう！」ということは言っている。子どもたちに疑問を出させたり、聞こうという気持ちにさせる。１限目はマークについてゆっくりリピートさせる。２限目はクラスを右半分と左半分に分けて発音させるなどしている。わからなかったら班の子に尋ねる。４人班のだれかに教えてもらう。そうすることで頭に残る。今日の授業の前は自分の一日の紹介をした。

・５年の授業ではできるだけ英語を使うようにしている。授業中の日本語と英語のバランスについてどう考えるとよいのだろうか。（小学校）

・指導案によるとマークの一日について聞き、子どもも自分で言ってみたいと思っただろう。英語で自分も表現してみたいと思わせるしかけができていたのだろう。いまどきは表現しにくい子が多い。仲間づくりによって表現できるようになるのだろう。自信を持たせることができる。何でも話せる関係ができると表現できるようになるのだろう。今日の授業ではＨＲＴとＡＬＴのパートナーシップがよく、子どももがんばれるのだろう。英語を真ん中に置き小中の先生がこうして集まれることがすばらしいことだ。（中学校管理職）

・子どもたちが落ち着いていた。「５分で英語になおす」「３分で練習しなさい」という指示は厳しいと思ったが、よくやっていた。時計を使って、動作にポイントをおくとよかったのではないだろうか。また最後のクイズでは答え合わせをその都度行うのがよかったのではないか。（小学校）

←安達先生：今日はあせりました。ねらいも盛りだくさんだった。答え合わせについては、まずは発表を全員にさせたいと思ったのでその後になった。

・リピートの声がよくでていてすばらしい。グループ発表の際の聞く態度についても、子どもたちはまわりの空気をよんでビシッと聞いていた。楽しみながら英語に慣れ親しむことがねらいなので、子どもたちのテンションもおのずとあがるだろうと思ったが落ち着いていた。マークの一日では聞く活動が多かったが、最後に話す活動につないでいたのですばらしかった。（小学校）

←安達先生：正解でなくてもよい、わからなくてもいいというムードは子どもたちがつくってくれる。担任も英語はわからないのでマークに尋ねている。「答えは×でも発表のしかたは良かった」などとフォローする。日頃からわくわくさせるしかけをしている。今日は特にわくわく感が大きかった。

・内容が多く、クイズは次の時間でもよかったかも。素直な子どもたちだ。
マークの一日では、日常のことがどんどん入ってくるのでよかった。（小学校）

・中学校区で豊南小と萱東小と四中の３校で集まり交流したが、小学校について知ることは大いにプラスであった。子どもたちが楽しんでいてよかった。ＨＲＴの子どもへの思いがベースとなっている。振り返りシートによると、多くの気づきがあったようで、ティームティーチングの成果を感じた。（中学校）

３）池田准教授による【講評】

・担当教員と児童の人間関係が土台となっていた。

・導入の＜マーク青年の一日＞は文化的気づきを児童に与えた。これは大きな目玉であった。児童に「聞きたい」と思わせる仕掛けがあった。

Ｑ：復習で児童が多くの単語を思い出していたが、こんなに覚えているものなのか？

Ａ：動作の表現は５年生で出ているが、スパイラルに出てきているので、子どもたちは覚えている。みんなで大きな声でリピートするとつられて言えるということはもちろんある。

Ｑ：音を聞いてなんとなく覚えているということでもよいのか？

Ａ：もちろんＯＫ．なんとなく覚えていることを中学校で勉強するということ。

Ｑ：小学校英語授業での日本語と英語のバランスは？

Ａ：子どもが理解するということが大切なので、英語を使うということにこだわらず、少しずつ英語を使っていけばよい。どうしても、ということなら指示を出す英語を使うようにすればよい。子どもは聞いて動くことができるから。

４）【研究協議】

～小中連携を目指してできること～

関西大学　准教授　池田真生子先生の講演より

１．はじめに

指導要領の改訂

１）小学校は５・６年で外国語活動が始まった

２）中学校は週４時間の授業が始まる

隠されたテーマは？

１）小中連携・中高連携・・・スムーズな連携

２）６３３制ではなく柔軟に考えていく

３）基礎力、コミュニケーション力の養成

小学校外国語活動（英語）の目的は？

習得は目的ではない・外国人が来ても逃げない・異なる文化・考え方があるということを知る・言葉への気づき・コミュニケーションへの態度の育成・外国人に対する構えをなくすことなど

２．小中それぞれの内容を知る

３．両者の橋渡しをスムーズに勧めるためには？

　　１）目標の共有と分担・・・

　　　・小学校は音声中心、やりすぎないこと
　　　・中学校は音声と文字をくっつける
　　　・中学校では小学校でやったことを受け止める
　　　・中学校では四技能の定着を目指す
　　　・コミュニケーションの自己表現を目指す

　　２）内容の連携

　　　①小学校で学んできた内容（素地）を中学に（伝える）
　　　②（６年最後のレッスンと中１最初のレッスン）を共有する
　　　③小学校は（教えすぎない）
　　　④中学校は（英語ノートの内容）をよく知る
　　　⑤（中学校に特化した活動）をよく考える
　　　⑥中学校での（双方向のコミュニケーション）を考える
　　　⑦中学校は（小学校で学んだことを否定）しない

　　３）（評価方法）のギャップを埋める

　　４）小中の連携、（小学校）同士の連絡

４．　おわりに

互いの違いを認識して、小中それぞれでできることは何かを考える。
互いの役割を理解できていることが大事。

５）《アンケート集約より》

＜小学校＞

・担任とＡＬＴの役割の割合は、どうしてもＡＬＴ任せになってしまっている中、（今日の授業では）担任の先生の授業コントロール、マネジメントが上手だなぁと思いました。
・他校での授業の仕方を知ることができて非常に有意義だった。小中連携についても学べた。
・担任としての役割を再確認できた。
・とても熱心に授業されており、また子どもたちも生き生き活動していたのでとても感激しました。ありがとうございました。
・研究討議で、ためになる話があり有意義でした。小中連携のポイントとなっているところがよくわかった。自分ができることを、もう少し考えてやらないといけないなと感じた。
・英語の得意な教師、不得意な教師がいるなかで、今後どのように小学校外国語活動を進めていけばいいのかを明確に。

＜中学校＞
・小中で英語の授業の話ができることに意義を感じた。講師の先生のお話をもっと聞きたかったが、早くでなければならず残念でした。
・小中連携のあり方を改めて考えるよい機会だった。池田先生のアドバイスが印象に残った。今後も小中連携をテーマに中英部会の活動をしていきたい。
・小学校でポジティブに英語を勉強していることを知ることができて有意義だった。池田先生に中学校の役割分担を教えていただき有意義だった。
・小学校の英語活動の内容や子どもの様子がわかったので有意義だった。その小学校英語活動を中学校にどう引き継いだらよいのかというお話が印象に残った。

（別添資料⑨）

小学校英語活動に関する１２月研究部会（報告）

（１）１１月部会（萱野東小公開授業研・研究協議）振り返り

●**学級担任の役割**は、「児童生徒の実態にあった授業を組み立てること」「児童が伝えたい内容を持ち、伝えようとするための授業づくりの工夫をすること」である。

●**ALT の役割**はネイティブであることを活かして、異文化・異言語を子どもに体験させること。

●**活動の目標**は教え込むことではなくコミュニケーションの素地を育てること。その授業のポイントとなる部分ができていればよい。

●**小中連携**については、外国語学習の学習は中学から始まるので、小学校外国語活動で親しんだことが、中学校での英語科の学習で「こういうことだったんだ」となればよい。

●**評価**は、コミュニケーションへの関心・意欲・態度、外国語への慣れ親しみ、言語や文化に関する気づきに基づいて行う。

●**児童の様子や授業での活動内容**については、中学校英語科教員へと丁寧に引継ぎをする。中学校英語科教員はそれを活かした授業づくりをする必要がある。(たとえば小学校で用いた教材を再び用いる等)

（文科省教科審査官：直山先生からの提言）「子どものことを知っている担任ならでは！ひとりひとりにみあった相手意識を持つということ。つまりは学級経営！子どもの姿こそが評価。つまり先生の目でしか見られない」

（２）評価について

・資料「評価から見直す外国語活動の指導のありかた」

直山木綿子（文科省教科調査官）

・ALTがゲームの説明をしているとき、HRTはそのそばにいる。
（一緒にカードをはる・そばにたつ）子どもの視界に２人いるところを見せることが大事。HRTはALTのせりふの最後の単語を繰り返す。これで子どもはHRTが英語を話していると思う。

（３）ALTの活用に関するアンケート集約報告
・各校の活用状況・次年度の予定

（４） １月「教育フォーラムみのお」内容について
・小学校外国語活動からの発表（３０分）
部長：新村先生（箕面小）とラフマン先生（ALT指導員）によるティームティーチング授業
・次年度への情報共有

（５）「使える英語プロジェクト事業」について
・「使える英語プロジェクトNEWS」配付
・状況説明・・・いまのとどろみと彩都の状況
＊英語教育支援員の動き　＊DVDレターのこと＊箕面高校との交流

（６）次年度に関する情報共有：英語ノート：各校配付は３月末
(ア)配付子ども用テキスト（子どもが直接活動で使う紙面作りとなっている。ワークシート的なもの）
(イ)配付マニュアル（指導案はネットでダウンロードする形。指導書は５・６年担任に配付される。赤刷り本のイメージ。指導のポイントが朱書きされているもの）
(ウ)配付デジタル教材
＊使用表現は同じ、語彙もほぼ同じ。配列は少し変わる。また題材により時数も変わる。
＊今の５年が新教材の２を使うとすると、アルファベット大文字が新教材１に移動しているため、ダウンロードして大文字をやる必要がある。

（７） 連絡
・Ｈ２４豊能教育課程研究協議会（小英の実践発表は箕面担当）
・１月研究部会は教育フォーラムへの参加を出席とする。
１月２５日（水）教育フォーラムみのお（場所：サンプラザＢ１）
・２月研究部会は中学校英語部会公開授業研への参加を出席とする。
２月１４日（火）第四中学校